

家庭科が教えてきた「食卓での家族団らん」

—戦後教科書から—

表 真 美

(教育学科助教授)

I. はじめに

1. 家族コミュニケーションの場としての食卓の可能性

文部科学省は2004年度から、児童生徒の問題行動等の状況調査に、高等学校での不登校件数を加えた。この背景には、若者のひきこもり、またいわゆる NEET (Not in Employment, Education or Training) の増加がある。中・高校生が不登校状態になったきっかけは、統計上では「学校生活に起因」することが多いとされるが、子どもたちの人間関係調整能力の低下が、要因の一つと考えられる。人間関係の調整のためには、相手を理解し、自分の意思を伝える力、すなわちコミュニケーション能力が必要となる。日常生活における家族とのコミュニケーションは、コミュニケーション能力育成の基礎となるものである。ところが、国際比較調査(総務庁1995)によると、日本の親子の接触時間はアメリカや韓国に比べて短い。両親の仕事からの帰宅時間が遅いことや、子どもの塾通いなどで、家族の時間にずれが生じていることが原因の1つであろう。同じ調査では、親子の共同行動でもっとも多いのは「食事をする」ことであった。実際に、夕食に揃うことが多い家族は、食事以外の共同行動の頻度も高く、家族員の緊密度が高いという調査結果もみられる(表真美1997)。家族が集まってコミュニケーションをとる場としての食卓が注目される。

2. 「食卓での家族団らん」の誕生と揺らぎ

「家族は食の分配集団」と言われ(石毛直道1982)、ホームドラマや挿絵でよく目にする家族団らんの食卓風景は、健全な家族の象徴となっている。テレビアニメ「サザエさん」や「ちびまるこちゃん」に登場するちゃぶ台を囲む場面を見て、多くの人が郷愁を感じるのは、日本には伝統的に食卓での家族団らんが存在し、それが日本の家族の絆を深めてきたと考えられているからであろう。しかし、石毛直道らは、家族揃っての食事は、銘々膳・箱膳にかわってちゃぶ台が庶民の家庭に普及する大正から昭和初期以降に始まり、また、会話をともなう楽しい食事が一般に実現するのは、ちゃぶ台がテーブルに移行する戦後以降であったことを指摘している。近代日本の日常の食卓風景は、箱膳を用いて家族が揃わずに時間のあるものからなされたり、家族が揃っても食事中の会話が禁止されていた。(石毛直道他1991)。それでは家族揃っての団らんをともなう食事はどのように誕生したのであろうか。食事の場での家族団らんの実現には、さまざまな要因が影響を及ぼしたと考えられる(図1参照)。物理的要因として家族が食事に揃う時間的余裕、個人の膳からちゃぶ台・テーブルへの移行、家族が集まりやすい食事室などの空間的要因、食事内容、また、家族揃った食事を支える主婦の存在があげられる。さらに、戦後の家制度の廃止から、家に代わって家族を結びつける道具として、新聞・雑誌、テレビなどのメディアが食卓に着目したと考えられる。1970年代のいわゆる「飯食いドラマ」(落合恵美子1998)はその典型であろう。

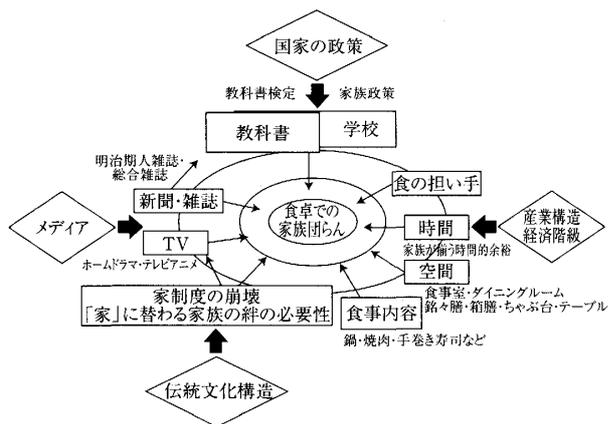


図1 食卓での家族団らんの実現に影響を及ぼした要因

国家の家族政策は、学校における教育という形で人々に普及されていった。家族の食事に関する領域を含む家事科・家庭科教育は、「食事は家族揃って楽しく食べるべき」という意識に少なからず影響を及ぼしたのではないだろうか。

高等女学校の家事科教科書においては、明治31年に発行された初めての検定教科書から「必ず家族皆一処に集まりて愉快地に飲食談話するやうにせば食物の消化も殊によく一家の和熟には素より大に益あるべきなり」との文言が掲載されている。明治期に検定された全高等女学校用教科書から専門書と改訂版を除く16種のうち、ほぼすべての教科書に、何らかの形で食卓での家族団らんに関する記述が見られる（表真美1998）。さらに遡って検定以前の家事科教科書を調べると、もっとも古くは、明治23年発行の村木経策著『家政要旨』に家族の食事に関する記述が見られ、家事科教科書における食卓での家族団らんに関する教育の起点であることが明らかである。この『家政要旨』は、キリスト教的平等主義を基盤とした家庭論を展開した木村熊二、巖本善治がかかわった「明治女学校」の講義録である。従って、明治中期の家庭論が、家事科教科書における食卓での家族団らんに関する記述に影響を及ぼしていたことがわかる（表真美2001）。

現在は、家族の時間のずれ、個室化や個人化を促す様々な道具の出現、家族の食事を一人で支えてきた妻・母親の雇用労働化、個人で食べることを容易にする中食の増大により、物理的

な要因に揺らぎが生じている。それに加え、個人主義の考え方が台頭し、子どもたちの間にも一人で食べる孤食が広がっているのが現状である。今後も「食卓での家族団らん」を維持していくためには、どのような対策が必要であろうか。家庭科はどのような役割を担うのであろうか。本稿では、家庭科教育が「食卓での家族団らん」をどう教えてきたのかを、戦後の教科書を対象とした調査により明らかにすることにより、今後の「食卓での家族団らん」に関する教育について考えたい。

II. 方法

対象とした家庭科教科書は、戦後から現在まで継続して出版されている教科書である。高等学校はJ社、中学校はK社、小学校は、2種の家庭科教科書が戦後から継続して現在まで出版されているので、K社、およびT社より出版された教科書を用いた。「食卓での家族団らん」を「家族が揃って食事をしながら団らんすること」と定義し、家庭科教科書のなかの、「食卓での家族団らん」に関する記述や挿絵などを抜き出して、その時代の社会的背景とともにどのように変化してきたのかを考察する

1. 対象高等学校教科書

対象とした高等学校家庭科教科書は1952年から2003年までに出版された29種である。高等学校家庭科は、1949・1951年発行の学習指導要領時は、「一般家庭」とその他の選択科目を含む「家庭」、1956・1960・1970・1978年告示時は、「家庭一般」であるが、1989年に、「生活技術」「生活一般」が加わり、1999年からは、「家庭基礎」「家庭総合」「生活技術」からの選択となっている。したがって、対象は「一般家庭」「家庭」「家庭一般」「生活技術」「生活一般」「家庭基礎」「家庭総合」「生活技術」の教科書を含んでいる。このほかに1994出版の『図説高校家庭一般』があったが、副読本的な内容であったので対象からはずした。1952～54年出版『一般家庭』、1956年出版『高校家庭』は3冊組、1957年出版『高

校家庭一般』, 1994年出版『生活一般』, 1998年出版『生活一般新訂版』, 1994年出版『生活技術』は, 2冊組, このほかは, 一冊完結であった。

2. 対象中学校教科書

対象とした中学校家庭科教科書は, 「技術・家庭」が始まった当初の1966年出版のものから2005年に検定された13種である。1975年まで「女子用」, 1978年は「女子向き」, 1981年からは「家庭分野」となっている。1966年から1978年までは学年に対応した3冊組, 1981年から1997年までは上下2冊組, 2002年の現行教科書と2005年に検定された新教科書は1冊完結である。

3. 対象小学校教科書

対象とした小学校教科書は, K社・T社各々1961年から2005年に出版された15種である。1958年, 1968年, 1977年, 1989年, 1998年に告示された学習指導要領に対応している。1958年から2000年までは5年生用・6年生用の2冊組み, 2002年・2005年出版のものは, 学年の枠組みをなくした1998年の指導要領に対応して一冊である。

Ⅲ. 結果と考察

1. 高等学校家庭科教科書調査結果

高等学校家庭科教科書の調査結果を表1に示した。同時に異なる著者が複数種の教科書を作成しており, 著者によって内容が類似しているため, 著者ごとにまとめている。1960~70年代には, ほとんど記述はみられない。1973年の学習指導要施行にともない, 食事の機能として, 家族そろって囲む食事の精神的機能が明記された。1991年まで, 「母の手による」というジェンダーバイアスの表現が含まれている。1980年代の前半までは, 生活時間の項目において「夕食後の団らん」が意識されているが, 1980年代後半になると, 共食状況のグラフが登場し, 家族揃った食事の場での団らんが強調され始める。

宮本他による現行教科書には, 「孤食」や「個食」の説明も加わり, より具体的になっている。

2. 中学校家庭科教科書調査結果

中学校家庭科教科書の調査結果を表2に示している。1966年と1969年の教科書は, 各々2箇所「食事は団らんの機会」といった記述が現れるが, いずれも「食卓で家族団らんすべき」ことを強く推奨するのではなく, その他の食生活の配慮点について述べるのが主眼である。1970年代, 1980年代前半は, 食事風景の挿絵が見られるが, 「食卓での家族団らん」に関する記述はない。1987年からは, 家族揃って食べる場合と子どもだけで食べる場合とを比較すると, 家族揃う方が食欲が増すことを示すグラフを用いて, 食事に家族が揃うことを推奨, また, 食事が日常の食事に家族が揃うことができない場合, 家族での会食を勧めるコラムが登場する。また, 1993年には共食状況のグラフが加わる。しかし, 1997年には, グラフやコラムは消え, 2002年の教科書では, 本文中の記述は食事の機能を説明する1文に減少する。一転して2005年に検定された新教科書には, グラフやコラムが復活する。また, 「孤食」や「個食」の説明も新しく加わっている。さらに, 異なる機関が行った家族が夕食に揃う頻度を示す2種のグラフが, 違うページに掲載されている。

3. 小学校家庭科教科書調査結果

小学校家庭科教科書は, 挿絵や写真が多く, 文章での説明が少ない。「生活時間」「すまい」「おやつ」の内容を取り扱うときに, 「団らん」という文言が多用されているが, 食事の共有と結びついた家族団らんについての文章による推奨は多く見られない。生活時間を学習する場面では, 家族共通の時間をもつための行為として「食事や団らん」が位置づけられている。しかし, 80年代前半までは, 「食事」と「団らん」は区別され, 「団らん」は夕食後の時間を利用することが示されている。T社の教科書には, 1961年から2002年まで, 家族の生活時間表の挿絵が挿入されている。生活時間表のなかの夕食

家庭科が教えてきた「食卓での家族団らん」

表1 高等学校家庭科教科書（J社）における「食卓での家族団らん」

No.	出版年	教科書名	食卓での家族団らんに関する記述・挿絵
1	1952～4	一般家庭	・No.2・3：いろりを囲む家族の挿絵 記述なし
2	1956	高校家庭	
3	1957	高校家庭一般	
4	1960	家庭一般	
5	1971	家庭一般	
6	1968	新編家庭一般	・No.6・7：「食事室は、家族そろって食事をとりながら団らんが行われる点で一種の居間として考えられる」（食事室の説明） ・No.7：食事室の説明頁にテーブルでの家族4人の食事風景の挿絵
7	1973	同上	
8	1973	高校家庭一般	・No.8～14：「母の手による食事を家族が揃って囲むときの幸福感など、精神的な役割も見のがすことはできない」（食事の役割・85年から口絵に家族の食事風景挿絵） ・No.9～10：「夕食や夕食後の団らんの時間を有意義に使い週に何回かはそろってお茶を飲むというようなことを家族で話し合い、皆の協力のもとに家庭生活を意義づけるようにする」（生活時間） ・No.11～14：「家族各人の生活を尊重するとともに、家族がいっしょに過ごす時間も重視し、夕食とその後の団らんの時間を有意義に使う」（生活時間） ・No.13～14：（夕食の共食状況グラフを示し）「労働時間帯の変化、塾通いなどによる時間のずれ、さらには家族員それぞれが自分個人の生活を求める傾向が強くなったことなどにより、家族団らんの機会が少なくなっている」（家族の意義）
9	1976	同 改訂版	
10	1979	同 三訂版	
11	1982	高校家庭一般	
12	1985	同 改訂版	
13	1988	同 三訂版	
14	1991	同 四訂版	
15	1985	新家庭一般	・No.15～16：「（夕食は）朝食や昼食に比べると、調理のための時間や手間もかけられるし、家族がそろって囲む夕食は、楽しいだんらんの場合であるから、（後略）」（1日の献立と調理） ・No.15～18：「家族や友だちとともに食事をしたり、お茶を飲んだりするときのなごやかなふんいきは、私たちに安らぎを与え、心のつながりをいっそう緊密にする」（食卓作法） ・No.17～18：「家族のコミュニケーションの場としての食事の重要な機能が失われることなく（後略）」（これからの食生活）
16	1991	同 改訂版	
17	1988	新版家庭一般	
18	1991	同 改訂版	
19	1993	家庭一般	・No.19～20, No.22～24：「生活の多様化、多忙化とともに、家族がともに食事をとることがむずかしくなり、一人での食事も多く、孤食ということばが生まれた。また、家族のなかでの好みが多様化したこと、調理済み食品の出現などによって、家族がそれぞれちがうものを食べる個食化傾向も見られる。さらに夜食などの間食を多くとり朝食をとらない欠食が増加している。このように多様化するくらしのなかで、家族関係も変化せざるをえないが、ときにはくふうをして、家族でゆっくりと食事をとりたいたいものである」（家族関係と食事） ・No.21：記述なし
20	1998	同 新訂版	
21	1993	生活技術（1・2）	
22	1993	生活一般（1・2）	
23	1998	同 新訂版（1・2）	
24	1998	新版生活一般	
25	1999	家庭一般 21	・No.26・27：「（2）昨日の朝・晩は家族と一緒に食事をしたYes・No」（食生活チェックリスト） ・No.26・27：「また、できるだけ家族や知人と食事をともにし、食卓の準備やあと片づけも行い、楽しいコミュニケーションを心がける。」（食生活をみなおそう） ・No.26・27：さまざまな食卓風景（一人暮らし・家族以外の人と共同で住む「グループホーム」・大家族・核家族の4つの食卓風景の挿絵：さまざまな生き方と住み方） ・No.25：記述なし
26	2003	家庭総合 21	
27	2003	家庭基礎 21	
28	2003	家庭総合	・No.28・29：「現代では、生活の多忙化・多様化により、家族が食事を一緒にとることが少なくなり、ばらばらな時間帯にひとりで食事をする孤食化がみられる。また、調理済み食品が簡単に手に入るようになり、外食産業も発達し、家族のそれぞれがばらばらなものを食べるという個食化の現象も見られる。その結果、欠食となりがちで、栄養的なバランスが取れないという健康への影響だけでなく、食事が楽しくないといったような心理的な影響が出てきている。食事には、栄養をとるとのことだけでなく、家族や友だちなど、一緒に食事をする人とのコミュニケーションを深めあうという大切な役割がある。うるおいのある食生活をきずくために、どのような課題があるのか、また、それを解決する方法にはどのようなものがあるか考えてみよう。」（食事におけるコミュニケーション） ・No.28・29：「私たちは、一人ではなく、家族や仲間とともに食事をする」（食事の作法）
29	2003	家庭基礎	

注) 各教科書の編者は以下のとおりである。No.1～5：日本女子大学家庭科研究会，No.6～7：奈良女子大学家政学会，No.8～14：高校家庭科学習研究会，No.15～18：岩崎芳枝他，No.19～24：伊藤セツ他，No.25～27：春日寛他，No.28～29：宮本みち子他

発達教育学部紀要

表2 中学校「技術・家庭」家庭分野(女子向き)教科書(K社)における「食卓での家族団らん」

指導要領	No.	出版年	食卓での家族団らんに関する記述・挿絵
58年告示 66年施行	1	1966	①「食事は家族団らんの機会でもあるから、家族の好みに合った、みなが喜ぶ食事を作るように心がける」(2年用:家族と食物) ②「食事は家族がだんらんするよい機会であるから、家族の状態をよく知り、献立に変化をつけたり、食卓を飾ったり配ぜんをくふうしたりして和やかなふんいきを作ることたいせつである」(2年:家族の食生活)
	2	1969	①「家庭での食事は家族のだんらんの機会でもあるから、栄養がじゅうぶんにとれるばかりでなく、家族のこのみにあい、全員が喜ぶようなものにするのがたいせつである」(2年:家族と食物) ②「食事は、家族がだんらんするよい機会であるから、家族のこのみや健康状態などをよく知り、献立に変化をつけたり、配ぜんをくふうして食卓を飾り、なごやかなふんいきで食事を楽しむようにしたいものである」(2年:家族の食生活)
69年告示 72年施行	3	1972	・記述なし
	4	1975	・記述なし 1年用巻末に家族4人の食卓風景挿絵
	5	1978	・記述なし 1年用に「わたくしたちの食事時間」と題して四角いちゃぶ台に家族4人の食事風景挿絵
77年告示 81年施行	6	1981	・記述なし 上巻に家族の食事風景挿絵が2枚(簡単な日常食の調理・ダイニングキッチンの計画)
	7	1984	・記述なし
	8	1987	①「食事はみんなでとるようにしているか」図:祖父母を含む6人家族の食事風景 「また、食事は人と人とのつながりを深めるはたらきもするので、栄養素のつりあいがとれた食事を、家族や友人などと楽しいふん開きでとることが必要である」(上巻:食事例と食事点検の例) ②「朝食のとり方による食欲の違い」図:家族そろって食べる場合と子どもだけで食べる場合の比較 「また、家族とだんらんしながら食事をする習慣が失われると食欲や栄養状態にも影響してくることがあるので(図参照)家族と協力して、楽しく食事できるようにくふうしよう」(上巻:わたくしたちの食生活) ③「家族は、食事をいっしょにつくったり、楽しく食卓を開んだりして、こころをかよい合わせ、愛情や思いやりを育て、助け合って生活している」 (下巻:成人の食生活:エプロン姿の父親を含む家族4人が食卓で食事準備する写真をとまう) ④「ふだんは忙しくて、家族がそろって食事をするのがむずかしい家庭でも、誕生日などのふし目をとらえて、会食の機会を作りたい」 (下巻:成人の栄養と献立:1頁を用いたコラム)
9	1990	上記1987年出版に、①③④は同じ ②に新しい文言が加わる ②「朝食のとり方による食欲の違い」図:家族そろって食べる場合と子どもだけで食べる場合の比較図 「また、家族とだんらんしながら食事をする習慣が失われると食欲や栄養状態にも影響してくることがあるので(図参照)家族と協力して楽しく食事できるようにくふうしよう。食事はただ空腹を満たすだけのものではない。人と人とのつながりを深める大切な意味を持っている。ほかの人たちにふゆかいな思いをさせたいで気持ちよく食事できるようにしよう」(上巻:わたくしたちの食生活)	
89年告示 93年施行	10	1993	①「食事をすることの状態」図:家族全員そろって・家族の誰かといっしょに・家族以外の誰かといっしょに・ひとりでの割合を示す ・「私たちは物質的なことだけでなく、家族や友人とのコミュニケーションが大切だと感じている。みんなの生活時間が異なると、コミュニケーションの機会がもちにくいから、家族の集まりやすい時間を利用して、おたがいのぞんであることを話し合い、理解を深めながら心の豊かさをはぐくもう」 ・「ホームパーティーを開こう」コラム(上巻:よりよい家庭生活を築いていこう) ②「食事はみんなでとるようにしているか」図:祖父母を含む6人家族の食事風景 「また、食事は生活の中の楽しみの一つでもある。家族や友人と同じ食卓を囲み、ともに満足感を味わうことで、食事をするのが、人と人とのつながりを深めることにもなる」(上巻:食事とわたしたち) ③「食事のとり方による食欲のちがいがいい」図:朝食・夕食それぞれ家族そろって食べる場合と子どもだけで食べる場合の比較図 「わたしたちは家族との生活時間がずれて、時には一人で食事をすることもある。楽しいふん開きの中での食事は、気分をなごませ、消化をよくし、人と人とのつながりを深めることにも役立つ。1日3回規則正しい食事を、家族やまわりの人たちと、楽しくとるようこころがけよう」 (上巻:食生活を大切にしよう)
	11	1997	①「食事はみんなでとるようにしているか」図:祖父母を含む6人家族の食事風景(上巻:わたしたちの食生活をふり返ってみよう) ②「楽しいふん開きの中での食事は、気分をなごませ、消化をよくし、人と人とのつながりを深めることにも役立つ。1日3回、規則正しい食事を家族やまわりの人たちと楽しくとるようこころがけよう」(上巻:食事マナーについて考えよう)
	12	2002 (現行)	①「人と人とがつながる生活」口絵:7枚の写真の一枚に「ともに食事をする」:祖父母を含む6人家族の食事風景 ②「家族や友人との楽しい食事は、人と人とのつながりを深め、私たちが豊かな気分させてくれます。」(食習慣と食事の役割について考えよう)
98年告示 02年施行	13	2005 検定	①「食事の役割」図:6つの食事の機能の一つに「人と人とのつながり」・祖父母を含む6人家族が鍋を囲む食事風景(食生活を自分の手で) ②「考えてみよう!食事の時間にどんなことを感じているだろうか。」コラム:2つの図「家族と生活リズムがちがうので、一人で食べることが多い。何かいい方法は無い?」「食事の時間に家族はそろって食べるけれど、みんなテレビを見ながらだまって食べている。なんか変?食事のマナーってあると思うんだ。」(食事の大切さをみな見直そう) ③「食事のしかた。食事の仕方は、生活のリズムや人と人とのつながり深くかかわっており、体の健康だけでなく心の面にも影響します。毎日決まった時間に朝食を食べることで、規則正しい生活を送ることができます。また、家族や友人とともにする食事は、大切なコミュニケーションの場となります。しかし最近の食生活では、一人だけで食事をとったり(孤食)、いっしょに食事をしてもそれぞれが食べたいものを食べたり(個食)する、いわゆる「こしょく」が増えています」 ・「1週間のうち、家族全員が揃って夕食を食べる日の割合」図:中学生高校生を持つ母親に対するアンケート結果グラフと挿絵「小学生のころ、夕食の時間に学校であったことを家族に聞いてもらったのが楽しかった。」挿絵中の女子生徒のセリフ(食事の大切さを見直そう) ④「家族全員で食べる朝食」:コラム「ウォッチング」「家族そろっての夕食の頻度」図 「Aさん(14歳)は、両親と高校生の兄、小学生の妹との5人家族。親は仕事で、子どもたちや塾や部活動、習い事などで、それぞれ帰宅時間がちがうため、平日の夕食は家族全員がそろえることがめったにない。一人で遅い夕食を食べるとき、Aさんは「家族そろって食事をしたいな」と思うことが多い。ある日、妹や兄も同じように思っていることを知った。家族で相談した結果、朝食なら全員が揃うことができるのではないかとということになり、一番早く家を出る兄の時間に合わせて、朝6時に家族全員が食卓に集合することを決めた。そのため、みんなが協力して食事をとるとのえ、顔を合わせながらの朝食ができるようになった。」

と団らんの仕切りがなくなるのは、父親が食事に揃わないことがはじめて表に示される1986年である。同時に生活時間のチェックリストの挿絵が現れ、5項目の1つに「食事を家族といっしょに食べているだろうか」という文言が加わった。1999年以降は兄も「習いごと」のために後から父とともに夕食をとるようになっていく。K社の教科書には、1989年にはじめて「私たちの毎日の食事には、栄養素をとるためのほかに、人々の心のつながりを深めるはたらきもある。家族や親しい友人といっしょに食事をすると楽しい気分になり、いっそうおいしく感じる。」(食事のしかた)といった家族の食事の共有と団らんを結びつける記述が登場し、現行教科書まで続いている。教科書ごとの家族の食事風景の挿絵と写真の合計数を、図2に示した。2社で数は異なるが、共通の動きを示している。1960年代、70年代は少なく、2002年、2005年出版に家族の食事風景の挿絵が急増している。

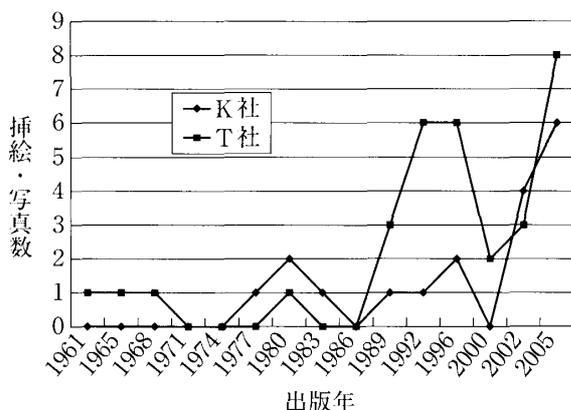


図2 小学校家庭科教科書における家族の食事風景図の変化

4. 結果のまとめと考察

戦後から現在までの、高等学校・中学校・小学校の家庭科教科書に描かれた「食卓での家族団らん」を概観すると、60年代から70年代前半まではほとんど記述が見られない。厚生省(現厚生労働省)国民栄養調査の1975年調査では、夕食は「家族一緒に食べる」との回答が、男性91.4%、女性88.8%であり、夫婦のみ世帯・親子世帯・3世代世帯に関係なく9割以上であった(厚生省1977)。この時代は多くの家族がそ

ろって食事をしていたので、あえて家庭科で教育する必要がなかったと考えられる。ところが、1982年、NHK「こどもたちの食卓～なぜひとりで食べるの～」の放映をきっかけに、子どもの孤食が社会問題となってからは(足立己幸他1983)、家族が食事に揃う頻度を示すグラフが掲載され、「孤食」の説明がされるようになる。2000年前後に一時的に「食卓での家族団らん」推奨が減少したのは、個人のライフスタイルの自由度が増し、画一的な家族モデルの提示を避けたためであろう。1997年には、家族の多様化を描いた一部の高等学校家庭科教科書が検定不合格となった。また、井上忠司は、「かつて団らんがあったかのごとく思い込もうとする社会心理、あるいは、これからも団らんし続けなければならぬと思いきこむ強迫神経症的な社会心理」を「団らん信仰」と呼び、現代家族の実態と意識との乖離を指摘した(井上忠司1999)。このような生活規範の押し付けへの批判が現れたのもこの頃である。さらに、2005年出版の小学校教科書、2005年検定の中学校教科書に今までにない「食卓での家族団らん」の強調が見られるのは、食育を「知育・体育・徳育の基礎をなすものとみなし」(食育基本法)重視しようとする文部科学省の影響と考えられる。

IV. 「食卓での家族団らん」に関する教育の今後

「食育」がブームである。2005年6月10日には、「食育基本法」が成立した。中教審答申「食に関する指導体制の整備について」(2004年1月20日)は、学校において食の指導の中核を担う栄養教諭の創設とともに、家庭における「食育」の重要性について示している。第1章「基本的な考え方」には、「家族一緒に食事は、家庭教育の第一であるとともに、大切な家族のコミュニケーションの場」でもあり、「食生活は子どもの身体的発達のみならず精神や社会性の発達など、心の成長にも大きな影響を及ぼすものであり、家族と一緒に食事をとる機会を確保すべき」とある。文部科学省が家庭教育支援のために作成し、子どもをもつ全家庭に配布して

いる子育て冊子『家庭教育手帳』は、2004年の改訂時に家族の食卓風景の挿絵を増やし、「家族一緒に食事」の重要性をより強調する内容となっている。今回の調査により、戦後家庭科教科書も同様の傾向を示すことが明らかになり、文部科学省の検定の意向がうかがわれる。食卓を家族のコミュニケーションの場に位置付けることには、異論の余地はない。しかし、ことさらに「食卓での家族団らん」のみを繰り返すだけでは、問題の解決にはならないだろう。前述のように、「食卓での家族団らん」が日本の家族に定着した背景には、時間・空間・食事内容・食の担い手といった物理的要因が大きく関わっている。まず、父親の長時間労働を解消し、帰宅時間を早めることが必要である。(財)家計経済研究所が2003年にスウェーデンの家族に行った調査では、7割以上の父親が6時には帰宅し、約6割が週5回以上家族全員で夕食をとっている(経済社会研究所・家計経済研究所2005)。また、子どもたちが現状のように学習塾に依存しなくてもすむような学校制度を実現しなければならない。経済協力開発機構(OECD)による国際学習到達度調査で2000年、2003年ともに好成績をおさめたフィンランドに、日本のような学習塾が存在しないことは、それが可能であることを示している。そして、食の担い手を確保することである。女性の雇用労働化が進んでいる。少子高齢化にともなう就労人口の減少により今後さらに女性の労働力を必要とする社会が到来するだろう。にもかかわらず、総務庁統計局の「平成13年社会生活基本調査」によると、依然として夫の家事時間は妻と大きな差をもって短く、妻が有業・無業で夫の家事時間に差がないことがわかっている。毎日複数回ある食事に関係する家事労働を妻(母)だけでなく、家族全員が担い、家族の食事を支えることが肝要である。家族全員の家事分担をすすめ、家族全員を食の担い手にすることが、「食卓での家族団らん」再生のための家庭科の役割であろう。今回の戦後教科書の調査では、高等学校教科書に1991年まで「母の手による食事を家族がそろって囲むときの幸福感」といった表現が

認められた。また、小学校教科書(T社)における生活時間調査表の食事前後の家族の行動を時系列で追うと、1974年までは「わたし」は朝・夕の食事準備、夕食のあとかたづけをしている。1977年には母は会社で働くようになるが、「わたし」のてつだいはあとかたづけだけになっている。1980年に兄が加わって4人家族になるが、父と兄は一貫してほとんど家事労働はしない。わずかに父は「ごみのしまつ」、兄は「犬の世話」をするだけである。1980・1983・1986・1989・1992年には朝食後30分はあとかたづけ、夕食前30分は夕食の用意をしていた「わたし」だが、1996・2000年に主人公が「けんたくん」になると朝食後のあとかたづけの時間は「犬のせわ」、夕食前の時間は「おやつ、テレビ」にあてられている。問題点をみつける内容であり、現状に即してはいるが、ジェンダー意識を改善するためには適切とは考えられない。今までの教育を反省して、今後に取り組みたい。

文献

- 総務庁青少年対策本部, 1995, 「子供と家族に関する国際比較調査」
- 表真美, 1997, 「家族の統合に関する研究—夕食の共有との関連を中心に—」『京都女子大学教育学科紀要』37号, p59-69
- 石毛直道, 1982, 『食事の文明論』中央公論社
- 石毛直道・井上忠司編, 1991, 『国立民族学博物館研究報告別冊 現代日本における家庭と食卓—銘々膳からチャブ台へ—』
- 落合恵美子, 2000, 「テレビドラマの家族史」『近代家族の曲がり角』p217-243
- 表真美, 1998, 「明治期高等女学校家事科検定教科書における食事の共有と団らん」『家政学原論部会報』32号, p82-89
- 表真美, 2001, 「家事教科書にみる家族の食事と団らんについての教育に関する史的研究—明治20年代までの家政書を中心に—」『家政学原論研究』35号, p38-47
- 厚生省, 1977, 『昭和52年度版 国民栄養の現状—昭和50年国民栄養調査成績』
- 足立己幸他1983, 『なぜひとりで食べるの 食生活が子どもを変える』日本放送出版協会
- 井上忠司, 1999, 「食事空間と団らん」井上忠司編『食の情報化』農文協
- 内閣府経済社会総合研究所・財団法人家計経済研究所, 2005, 『スウェーデンの家族生活—子育てと仕事の両立—』